

ジ  
ロ  
ン  
と  
ジ  
ロ  
ン  
イ

あらすじ

ブラジルで目が覚め驚くジュン。子供の頃父の起こした事件が原因でジュンは解離性同一性障害となった。昼は内向的なジュンで夜は活動的な純也：定期的に人格交代するようになったがジュンは義姉の綾乃にほのかな恋心を抱きつつそれなりに安定した日々を送っていた：ところが最近突然不安定になり始めたのだ。純也のスマホ動画の助けもありなんとか帰国したジュンに担当医の篠田は人格融合を提案する。が変わりたくないジュンは拒絶する。

しかし不安定な状態は加速し不定期に交代するようになるジュン。そんな中ジュンは純也の恋人遥香と出会う。不甲斐ないジュンに冷たかった遥香だが次第に打ち解ける二人。自分は本当は変わりたいと遥香に告白するジュン、綾乃や純也や遥香のためにも融合した方が良いと感じ融合を決意する。治療一回目の薬の投与が始まりジュンは純也の記憶を感じるようになる。純也の誕生、遥香との情事、父の発見と死、ブラジルの謎、不安定化の原因：記憶の断片が埋まっていき次第に純也を理解し始めるジュン。

しかし良い事ばかりではなかった。薬の過剰投与による人格喪失の報告、綾乃と篠田の密会、遥香の疑念、不審な行動をする純也：ジュンの知らない所で恐ろしい事が進行していた。そして綾乃から衝撃の事実を聞かされるジュン、純也は薬を使い純也自身の人格を消そうと計画しているというのだ。父の事件により誕生した自分は父の死で消えるべきと考えていた。綾乃の必死の説得で自殺を思いとどまる純也、ジュンと純也と自分：また以前のように穏やかに暮らしていこうと言う綾乃、微笑み頷くジュン。

目が覚めるジュン、診察室のベッドに縛られている自分に気付く。綾乃に抱かれる純也、惨殺死体、忌まわしい事件の真実：様々な記憶がジュンの脳裏をかすめる。そこに綾乃が現れジュンに告げる、綾乃もまた薬を使いある計画を立てていた、それは：ジュンの人格を殺すこと。毎晩綾乃を犯していた父とそれを覗き見していたジュンを憎悪していた綾乃は自分を助けるために生まれた純也をいつしか愛するようになっていたのだ。綾乃に薬を大量投与されるジュン、泣き叫びながら謝るが意識を失う。

目が覚めるジュン、薬の効果が薄れ純也と交代したのだ：70年後に。自分の状況を理解し絶望の中嗚咽する老体のジュン。

(全編ジュン目線で描写)

登場人物表

笠原ジュン（17）：解離性同一性障害。高校生。内向的。

笠原純也（17）：ジュンの別人格。頭も良く活動的でモテ男。

笠原綾乃（22）：ジュンの義姉。医大生。

笠原徹（51）：ジュンの父。医者。綾乃の母と再婚。行方不明。

二宮遥香（17）：純也の恋人。高校生。

篠田（38）：ジュンの担当の心療内科医。

松村（30）：刑事。綾乃の知り合い。

鈴木奈央（40）：病院の清掃員。

ブラジル娘（25）：ブラジルの娘。

笠原弥生（41）：綾乃の母。

学生A（21）：医大生。

学生B（22）：医大生。

○暗闇

不安と恐れが渦巻く真っ暗な暗闇。

○ブラジル・リオデジャネイロ・海岸（昼）

目を見開く笠原ジュン（17）、恐る恐る周りを見回すジュン、照りつける太陽、浜辺の海水浴客、陽気な音楽。水着姿のブラジル娘と手を繋いでいる事に気づくジュン、慌てて手を離す。ポルトガル語で怒り出す娘。

ジュン「：ここ：どこ：」

混乱し訳がわからないジュン、身振りで謝りその娘から離れポケットからスマホを出し慣れた手つきで動画を再生、動画に映し出されたジュンと同じ顔の男が話し始める、ジュンとは全く違いつても落ち着いた雰囲気でカッコいい、男はタクシ―に乗っているらしい。

動画の男・純也「この動画を見てるって事は発作が起きちゃったかな。ジュン、君は今かなり動揺してるね？　そしてちよっぴり怒ってる：かな？　（笑う）」

ジュン「：どこ：なの：」

純也「発作が起きる前ってなんとなくわかるよね？　今はそういう感じが全くないからまあ大丈夫だとは思うけど念のために撮っとくね。ここはリオ」

ジュン「：へ：？」

純也「リオデジャネイロ。ブラジルだよ」

ジュン「丘の上のキリスト像に気付くジュン。」

ジュン「（怒りが沸々と）：純也の奴：」

純也「あ、やっぱり怒ってる？　（笑いを堪え）でも君に遠慮ばかりしてたら俺はどこへも行けないじゃない。そうだろ？」

ジュン「：勝手な事を：」

観光客相手の土産売りがジュンにまわりつく、必死で逃れるジュン。

純也「泊まってるホテルとか日本に帰る場合の手続きの仕方を教えるね。でも楽しめばいいと思うけどなあ。だってブラジルだ

よ？ 地球の裏側だよ？」  
ジュン「（苛々し）：ふざけんな！」

○ブラジル・リオ・街中

スマホで『綾乃姉さん』と表示された  
番号に掛けるジュン、が繋がらず。

ジュン「（苛々し）ああっ！」

怪しげな街を警戒しながら歩くジュン、  
怪しげな男達が近づいてくるのに気付  
き逃げるジュン、男達に囲まれそうに  
なるがなんとかタクシーに飛び乗る。  
肩で息をしているジュン、恐怖と不安  
と不機嫌が混ざり合った顔。

純也の声「いい経験になると思うんだけどな。  
人生なんてあつという間だし、しかも俺達  
はその半分ずつしか生きられないわけだし。  
色んな物を見て色んな事をしようよ。友達  
を作ったり恋人を作ったり泣いたり笑った  
り：そしたら姉さんも喜ぶと思うよ？」

○ブラジル・リオ・ホテルの部屋

あたふたと荷物をまとめているジュン。  
純也の声「と言っても君は多分帰国するかな。  
荷物はちゃんと持って帰ってね。俺の服は  
君も使ってるだろ？（苦笑）」  
鞆に服や靴を詰め込む不機嫌なジュン。

○飛行機

毛布にくるまっているジュン。  
純也の声「憤慨しているとは思うけど、もし  
日本にいたら今日はどんな一日だったか  
な？ いつも通り家と学校の往復だけで何  
もない一日だったんじゃないかな？」

客室乗務員がジュンに声を掛けるが何  
も答えず頭まで毛布を被るジュン。  
純也の声「経験と思ひ出の積み重ねが人生な  
んだと思うよ」

震えながらじっと耐えているジュン。  
純也の声「：良い事も悪い事も含めてね」

○タイトル 『ジュンとジュライ』

○日本の空港（昼）

季節は10月下旬、小走りに入口から入り辺りを見回す笠原綾乃（22）。

ジュン「（後ろから）綾乃さん！」

綾乃が振り返るとジュンが旅行鞆を捨てて子供のように走ってくる。

綾乃「（安心させるような笑顔で）ジュン、

おかえりー（両手を広げる）」

大袈裟にジュンを抱き締める綾乃、恥ずかしいが嬉しいジュン。

綾乃「凄いいじゃない、ブラジルから一人で帰ってくるなんて。ジュン偉いっ」

ジュン「（泣きそう）うん！」

綾乃「もう大丈夫。怪我はなかった？ 普段と変わった所はない？」

ジュン「特には！」

ペンライトを取り出し慣れた手つきでジュンの目を照らし診る綾乃。

ジュン「純也の奴最低だよ！ブラジルなんて！綾乃さんは聞いてたの？」

綾乃「行く直前にね、ちよつと遊びに行くって。ごめんね、私からもちゃんと言っとくから。もうこんな事させないから」

ジュン「うん！。あーもうへトへトだよ！早くうちに帰りたい」

綾乃「（ペンライトを仕舞い）ちよつとその前に先生の所に寄ってこ？」

ジュン「え、今から？ どこかおかしい？」

綾乃「ううん大丈夫。でもそのほうが安心だし。ね？」

ジュン「：うん」

綾乃「ちよつと電話してくるね」

ジュンから離れ綾乃が携帯を掛ける。

綾乃「：義弟は先程：はい：あと1時間ほど：診た感じでは特に問題は：でも医者のおの卵の卵の診断なので：はい：」

不安げなジュンに気づき微笑む綾乃、微笑んで見せるジュン。

○ 大学病院・外観

都心の病院、東京タワーが近くにある。

○ 大学病院・心療内科診察室

落ち着いた雰囲気の診察室、篠田（3

8）がジュンの血圧を測定している、

ジュンの横には綾乃がいてノートに色々とメモを取っている。

篠田「それは災難だったねえ」

ジュン「もういやです：あいつ：」

篠田「恋人じゃないから嫌だからってすぐに別れられないよ、解離性同一性障害は（苦笑）」

ジュン「そうですけど：」

綾乃「6年も共存してきたじゃない」

篠田「（頷き）もつと分かり合えないかな」

ジュン「：何考えてるのか全くわからないです：最近は特に」

篠田「でも良い事だつてあるじゃない。例えば純也君がボクシングジムで体を鍛えているからその引き締まった体をジュン君も使う事ができるわけだし」

ジュン「：んー：」

篠田「純也君がこの病院で清掃バイトをしたりうちの子の家庭教師をしてくれたりしてからそのバイト代をジュン君も少しは使う事ができるわけだし」

ジュン「：そうですけど」

篠田「こないだだって純也君が中間試験受けてくれたからジュン君は学年一位になれたわけだし」

ジュン「アレは逆に迷惑でしたよ：僕らの事は皆には言っていないのに：余計な事を」

篠田「（笑い）ま、利用し利用されだよ。それでいいんじゃないかな」

ジュン「：うーん：（納得できない）」

綾乃「もつとちゃんと報告とか連絡が欲しいのよね、ジュンは」

ジュン「（頷き）純也は：なんでも秘密にし



たがるから」

篠田「今度純也君に会ったら伝えておくよ。

最近この研究室にもよく来るんだ」

ジュン「ここに？」

篠田「自分の病気を独自に調べてるんだよ」

ジュン「そうなんですか？」

篠田「その辺の医者以上に知識が豊富でね、

私もうかうかしてられないね（苦笑）」

ジュン「（心配そうに）：あの：このあと

どうなるんですか？」

綾乃「（篠田と目が合う）」

ジュン「二ヶ月前までは安定してたのに：昼

は僕で夜は純也で：そうやって6年も過ご

してきたのに：それが突然おかしくなって

：交代の間隔がどんどん不規則になって：

一日に何度も交代する事もあれば何日も交

代しない事もあって：

篠田「：：：」

ジュン「このままもつと不規則になっていつ

たら：何かの拍子に：自分が：消えてしま

うんじゃないかって：そんな気が：

篠田「（少し考え真面目に）：純也君は人格

融合してみたいそうだ」

ジュン「（驚き）：：：」

篠田「ジュン君がOKならすぐにでもって」

ジュン「：急に：そんな事：」

篠田「人格融合については前にも説明したよ

ね。E R T α という薬をそれぞれに少しず

つ投与して二人の人格を弱めその後には催眠

療法で二人を融合するんだ」

ジュン「：前はゆっくりでいって：」

篠田「状況が少し変わったんだ」

ジュン「：そんなに：危ないの？（不安

げに綾乃を見る）」

綾乃「（安心させるように）大丈夫。少し不

安定なだけよ。ただ、常に万が一の事は考

えておかななくちゃいけないの」

ジュン「：うん：でも：」

篠田「不安定な時期だけだからこそ二人を

隔てている壁が脆くなっているという見方

もできるんだ」

ジュン「：融合したら：純也に取り込まれてしまいうで：」

篠田「そんなに心配しなくたっていいんだよ。新しい人格はジュン君でもあるし純也君でもあるんだから。本来の自分に戻るだけだよ。いや融合できればそれ以上だよ。純也君の知識や経験だって共有できる。ちょっと女癖が悪い所が玉に瑕だけだね（笑）」

ジュン「：僕は：今のままが：」

篠田「ちよっと考えてみてくれないかな」

ジュンをじっと見つめる綾乃。

○笠原家・外観（夜）

都内の住宅街の古びた洋風な一軒家。一階は元診療所だったらしく看板らしきものもある、診療所の出入り口は使われていなく裏に玄関がある。

○同・二階・居間

古びた家具がある広いリビングダイニング、椅子に座り元気なく手料理を食べているジュン。

綾乃「ちよっとジュンさんジュンさん」

ジュン「：？」

綾乃「この綾乃様が腕によりを掛けてジュンの好きな物ばかりを作ってあげたというのに、なにそのしょんぼり顔は」

ジュン「ごめんなさい：（慌てて食べてむせる）」

少し笑いジュンの口元に付いたソースを丁寧に拭く綾乃、照れるジュン。

綾乃「今日は色々あったからね、疲れちゃったよね。いっぱい食べてお風呂入って寝なさい（優しく微笑む）」

ジュン「うん：（食べる）：やっぱり人格融合したほうがいいのかな」

綾乃「：そればかりは自分で決めないとね」

ジュン「：（頷き）：このままじゃダメだっというのわかる：変わらなきゃって」



○バス（朝）

座席に座りぼんやりとしている制服姿のジュン、同じ制服を着た他の男子や女子は友達同士仲良く話しているがジュンは孤独感が漂っている。

停留所に止まり制服姿の二宮遥香（17）が乗り込んでくる、吊革につかまりチラッとジュンを見る。

ジュン「（視線に気づき）：？」

目を逸らし鞆から教科書を出し開く遥香、暫くしてまたジュンを見る。

ジュン「（気づき会釈）」

目を逸らす遥香、恥ずかしげに俯く。

× × ×

停留所に着き逃げるように降りる遥香、ジュンも同じ停留所で降りる。

○高校・教室

英語の授業、最前列の遥香がスラスラと英文を朗読している、窓際の席に座りぼんやりとそれを聞いているジュン。朗読が終わり席に座りつつチラッとジュンを見る遥香、目を逸らすジュン。

○同・屋上（昼）

隅でスマホで撮影しているジュン。

ジュン「えっと：クラス委員の二宮：遥香？」

って子かな：やたらとこち見てくるんだけど：なんかあった：よね？：困るよ：ちゃんと報告してくれないとー」

屋上の反対側で小柄な男子が不良3人組に囲まれ苛められているのに気付くジュン、殴られる男子、驚き立ちあがるジュン、不良のリーダーがジュンを睨む、怖くなり去ろうとするジュン。

× × ×（フラッシュ）

ドアの隙間から診察室を覗き固まっている11歳のジュン。

× × ×

立ち止まり後ろを振り返り拳を握り締める、がそのまま立ち去ろうとするジユン、体がビクつとする。

ジユン「（頭を押さえ）：うっ：」  
更にビクつとし頭がカクンとなり白目を剥くジユン、カットアウト。

○ホテル・ラウンジ（昼×回想）

スーツを着た笠原徹（44）とジユン（10）がいる、そこに病弱な感じの弥生（41）と綾乃（15）が現れる、挨拶をしジユンを二人に紹介する徹、恥ずかしいジユン、ゆっくりと顔を上げると綾乃と目が合う、にっこりと微笑み手を差し出す綾乃、真っ赤になりつつそつと握手をするジユン。

○高校・屋上

目を見開くジユン、目の前に顔面血まみれの不良2人が倒れていて、リーダーもフラフラである。

ジユン「えっ：何してんだよ：」

手の痛みに顔を歪めるジユン、劣勢のリーダーが殴りかかって来る。

ジユン「え、え：？！」

リーダーの破れかぶれの一撃がジユンの顔にヒット、リーダーはそのまま倒れる、ジユンもゆっくりと倒れる。

遥香らしき声「（駆け寄り）純也君！」  
意識を失うジユン、カットアウト。

○浜辺（昼×回想）

楽しみに砂浜を走り回る10歳のジユンと綾乃、そのあとから徹と弥生が幸せそうに歩いてくる、ジユンが逃げ綾乃が追いかける、ジユンを捕まえギユウっと抱き締める綾乃、笑うジユン。

○大学病院・病棟・廊下（夕方）

目を見開くジユン、清掃員の格好をし

てベンチに座っている、手には包帯が巻かれている。

鈴木奈央（40）「ブラジルかあ。だからポルトガル語勉強してたんだね。純也君ってほんと凄いな。んん、どうしたの？」

ジュン「：いえ：別に：（呟く）バイトか」

奈央「さて、休憩終了つと。働こっか」

ジュン「あ、あの、ちよつと具合が悪いので今日は帰ります：ね」

奈央「えー大丈夫ー？ 送ってこか？」

ジュン「いえいえ：大丈夫です：ありがとうございませす。では：（去る）」

廊下を歩きつつスマホを操作する。

ジュン「まさか今の人も：」

スマホに純也の新しい動画はない。

○笠原家・二階・居間（夜）

机の上にメモ『ジュン』純也へ。大学でレポート作成のため今夜は遅くなるかも。さみしいかい？ さしみいか？ 綾乃『』

ジュン「：：：」

○同・二階・ジュンの部屋

黙々とレトロゲームをしているジュン、床の上には食べかけの冷凍食品、壁の時計は十時過ぎ。

玄関のベルが鳴る、立ち上がり嬉しげに玄関へ走るジュン。

○同・一階・玄関

ドアを開けるジュン、ヨレヨレスートの松村（30）が立っている。

松村「あれ、綾乃ちゃんは？」

ジュン「（驚き警戒）：いないですけど：」

松村「こんな時間に？ 結構遊んでるんだな」

ジュン「（嫌悪感）：あの：」

松村「あ、ジュン君？」

ジュン「：：？」



ジュン「……」

松村「またみんなで幸せに暮らせるね。そう  
思わない？」

ジュン「……（動揺）」

松村「（ジュンの反応を見て笑いを堪え眩

く）なんも知らねんだな（帰る）」

ジュン「……」

○同・一階・廊下

薄暗い診療所の廊下をゆっくり歩くジ  
ュン、突き当たりの診察室の前で立ち  
止まる、ドアノブに手を掛け恐る恐る  
少し開ける、が苦しい顔になりまた  
ドアを閉めるジュン。

○同・二階・居間

力なくソファに座りながらスマホで動  
画を撮っているジュン。

ジュン「（外の夜景を見て）……夜って長いね  
……そして怖い……純也は毎日こんな景色を見  
てたんだね。真夜中に一人きりで……」

考え考え話しているジュン。

ジュン「……最近夢をよく見る。昔の思い出  
……楽しかった事とか……色々と……」

棚の上に飾ってある昔の写真立て（浜  
辺で撮影した変顔のジュンと素敵な笑  
顔の綾乃の写真）を見るジュン。

ジュン「……あの夜……ほんとは何が起きたんだ  
ろ……（写真の綾乃を見つめ）……僕以外はみ  
んな知ってるような……そんな気が……」

少し考え録画を止め削除するジュン。

× × ×  
朝、ソファから落ちそうになり目が覚  
めるジュン。

ジュン「（体の上の毛布に気付く）あれ……」  
綾乃「（忙しげに支度をしつつ）やっど起き

た。遅刻しちゃうよ？（微笑む）」

ジュン「あ……うん（のっそりと起きる）」

綾乃「その怪我どうしたの？ 純也？」

ジュン「うん……学校で……」



綾乃「ほんと純也はトラブルばかりね…（時計を見て慌て）御飯作ってあるから。ちやんと食べるのよ」

ジュン「ありがと…もう行くの？」

綾乃「まだレポート終わってなくて。医大生は超多忙なのだ。時間を私に頂戴—」

上着を着て鏡でチェックする綾乃。

ジュン「…あの…昨日さ」

綾乃「（聞こえず）しばらく遅くなると思うから夕飯は外で食べてきたら？（バッグを持ち）じゃいつてきま—す」

ジュン「…」

○バス（朝）

ぼんやりと外を眺め座っているジュン、停留所に止まり遥香が乗り込んでくる。ジュンに気付き目を逸らす遥香、少し考え立ち上がり遥香に近づくジュン。

ジュン「あの…」

遥香「…」

ジュン「えっと…なんていうか…」

遥香「…（鞆から教科書を取り出し開く）」

ジュン「…（手の包帯に気付き）あ、これっ

て…もしかして二宮さんが？」

遥香「（チラッと見て）…（頷く）」

ジュン「そか…ありがと。初めてですね、こうやって話すの…て会話してないか…あの…ちよっと聞きたい事が—」

体がビクつとするジュン、驚く遥香、頭を押さえるジュン、頭がカクンとなり意識を失う、カットアウト。

○病院・個室（昼）（回想）

設備の整った病室、ベッドの上で病弱な感じの弥生、囲むように見舞っているジュン（11）・綾乃・徹、徹は親しげに院長らしき人とも話をしている、弥生を元気づける三人、病室を去り際に徹はそっと綾乃の腰に手を当てる、徹と目が合う綾乃、嫌悪感を覗かせる、

それに気づくジュンの目。

○ラブホテル（昼）

目を見開くジュン、全裸でソファに座っている自分に気付き慌てる、前方のベッドの端に半裸の遥香が後ろ向きに座りブラを着けているのに気付く。

ジュン「えっ…（更に慌てる）」

遥香「（向こうを見たまま）…妹の誕生会とかほんと馬鹿げてると思うけど…でも純也

君が来てくれたら嬉しいです…」

ジュン「（服をかき集め）…あ…いや…」

遥香「…両親にも紹介したいし…」

ジュン「…んと…その…（パンツを探す）」

遥香「ごめんなさい…重いですよね、こういうの…（振り返りジュンの顔を見る）」

ジュン「（パンツが膝に絡まったまま）…」

遥香「（異変に気づき）あ…  
ベッド上を四つん這いで近付いてくる

遥香、気圧されソファに倒れるジュン。

ジュン「（生唾ごっくん）…」

遥香「（ジュンの顔や体をじっくり観察し）

…もしかして笠原ジュン？」

ジュン「（股間を隠し縮こまり）…はい…」

遥香「（笑い）ヤバイ」

ジュン「…」

遥香「（笑い）ウケる」

ジュン「（ムツと）…」

遥香「ごめんごめん、だっておかしくって」

ジュン「…何がですか」

遥香「純也君と全然違うんだもん（笑う）」

ジュン「…」

遥香「（ベッドから飛び降りジュンに近付き

観察）二重人格とか半信半疑だったけどほ

んどだったんだね。何が違うんだろ、雰囲気

気っつかオーラが全然違うね」

ジュン「…」

遥香「純也君は光り輝いてるけどキミは…ん

ん、ヘナチョコって感じ（笑う）」

ジュン「…」

遥香「ごめんごめん傷つけちゃった？ デリ  
ケートなんだよね？ ずっと同じクラスだ  
ったけど全然知らなかったよ、キミの存在  
そのものを」  
ジュン「：二宮さん：普段と全然違うんです  
けど：そんな人でしたっけ：」  
遥香「普段？ あんなの優等生をただ演じて  
るだけ」  
ジュン「：でも：いまさっき純也には：」  
遥香「笠原ジュンはほんと馬鹿だ。純也  
君にこんな姿見せれるわけないじゃん」  
ジュン「：：」  
遥香「純也君には常に最高の二宮遥香を見て  
貰いたいのだ、ふふふ」  
ジュン「：えと：純也から何も聞いてないの  
で：その：」  
遥香「私達付き合ってるの。とろけるくらい  
相思相愛」  
ジュン「えっ」  
遥香「うっそー。（無表情に）ただの友達：  
よりは上かな」  
ジュン「：でもこっつて：」  
遥香「（無視して）そっか：私の話聞いてな  
いんだ：私は聞いているよ、キミの事。（思  
い出すように）えーっと軽度の無気力症と  
中度の対人恐怖症と極度なシスコンだけ  
かな、なるほどねー」  
ジュン「：純也の奴：」  
遥香「（ジュンの横に座り）純粹だからあま  
りイジメないでくれよって」  
ジュン「（遥香を避けるように逃げ）：：」  
遥香「（再びジュンに密着し）無垢だから  
色々教えてやってくれよって」  
ジュン「：：（赤面）」  
遥香「うっそー（笑う）」  
ジュン「：：」

○ラブホ街の街角（夕方）  
ジュン「じゃあまた：学校で：」  
遥香「（少し考え）ねえ」

ジュン「：何ですか」

遥香「もし私が純也君と付き合っただけで結婚とかしたら：うーんそれはわかんないけど：そしたらキミと違ってこれからも付き合っただけじゃなくちゃいけない？」

ジュン「それは：まあ：」

遥香「あと70年生きるとしてその半分って事は35年キミと暮らす事になる」

ジュン「：そうですね：」

遥香「そうですねじゃなくて。心の傷だからんだか知らないけどお姉さん以外の人とは接しないわ勉強もしないわ遊びにも行かないわ：そんなんでいいの？」

ジュン「：：：」

遥香「もつとちゃんとしてくれませんか？も

つとちゃんと生きてくれませんか？」

ジュン「：そんな事：言われても：」

遥香「私、純也君が好き。愛してる。でもキミのせいで純也君の貴重な時間が奪われてる」

ジュン「：でも：これは元々僕の体だし：」

遥香「どっちの物かなんて関係ない」

ジュン「：：：」

遥香「もしそれができないのなら：純也君に譲った方がいいんじゃない、その体」

ジュン「：：：」

○バス（夜）

元気なく座りスマホを見ているジュン。

動画の純也「（ボクシングジムで撮影、隅で

休憩中）君とバスで交代して2日経ったよ。

そろそろ発作が起きそうな予感がするから撮っとくね」

ジュン「：：：」

純也「そう、遥香とは仲良しだよ、とってもね。ほら中間で成績トップになったじゃん。で、それまでは彼女がずっとトップだったんだって？ 彼女のには衝撃だったんじゃないかな。何この男？ なんなのコイツ？ え、なんで胸がドキドキするの？ 的な。」

まあそんな所から始まって今に至るよ」

ジュン「…意味がわからない」

純也「…先生から聞いただろ、人格融合の話」

ジュン「…」

純也「知ってる？ E R T a って元々は酔い

止めの薬なんだって。じゃあ今の俺達は酔いつてる状態なのかな（苦笑）」

ジュン「…」

純也「そうそう先生からの伝言。『融合に使用する薬は国内未認可だから輸入手続きや使用許可なんかも必要で時間が掛かるからとっとと決めてくれーはやくー学会で発表したーい』…ってのは冗談だけど内心バレバレだよな、あの先生（笑）」

ジュン「…」

純也「…君とひとつになれたら嬉しい。なんとかなるよ、大丈夫」

ジュン「…」

純也「（画面後方、遥香がやってきて純也を捜している）さて遥香と遊びに行くかな。（真面目な顔つきになり）…まだ怖いんだって？ 一階の診察室」

ジュン「…」

純也「そんなに怖がらないでよ…あそこは俺が生まれた場所なんだから」

ジュン「…」

○笠原家・一階・玄関外の道（夜）

玄関へ歩くジュン、玄関から離れた所に車が止まり綾乃が降りてくる。

綾乃に声を掛けようとするジュン、が綾乃は運転手の篠田と何か話をしている、思わず隠れるジュン。

ジュン「…」

少し酔った感じの足取りで玄関に来る綾乃、ジュンに気付く。

綾乃「（陽気に）ハイイ」

ジュン「…おかえりなさい」

綾乃「どっちかなー？ どっちだろー？ ジ

ジュン？ 純也？」

ジュン「：ジュンだよ」

綾乃「なーんだ、ジュンか」

ジュン「：：：」

綾乃「冗談（笑いジュンの頭を撫でる）」

ジュン「：：：」

○同・二階・居間

綾乃の体を支えつつ歩くジュン。

ジュン「：珍しいね、お酒なんて」

綾乃「（フラット）友達とちよつとねー」

ジュン「：そう。横になったほうがいいよ」

ソファに寝かせようと綾乃の体を支えるジュン、ふいに綾乃がジュンの体を抱き締めジュンの首筋に顔を埋める。

ジュン「：ちよつと、綾乃さん：」

綾乃「：匂いは同じなんだね」

ジュン「：：：」

そのままソファに寝そべり寝入る綾乃。綾乃に毛布をそつと掛けるジュン、綾乃の寝顔をじつと見つめる。

○高校・教室（昼）

国語の授業、ぼんやりと座っているジュン、最前列の遥香を見る、遥香はジュンを見ずに黙々と授業を受けている。

○同・校庭（放課後）

ぼんやりと歩いているジュン、その近くを遥香が通り過ぎて行く、何か声を掛けようとするが掛けられずしよんぼりするジュン、そんなジュンをチラッと見て去る遥香。

カキーンと金属音がし顔を上げるジュン、野球ボールがジュンの頭を直撃、意識を失う、カットアウト。

○笠原家・一階・玄関（夕方）（回想）

グローブと金属バットを持ち遊びに行こうとするジュン（11）、制服綾乃

が帰宅、いつてきますとジュン、何かを言い掛ける綾乃、後ろから綾乃の肩に手を掛ける徹、俯き加減に家に入る綾乃、何かを感じるジュン。

○同・二階・ジュンの部屋（深夜）（回想）

ハッと目が覚めるジュン（11）、微かに何かの物音が聞こえる、恐る恐る部屋を出る、隣りの綾乃の部屋のドアが開いているが綾乃はいない、そのままゆっくり階段を降りる、廊下の突き当たりの診察室のドアに近づく、何か聞こえる、嗚咽のような喘ぎ声のような声、ドアノブをゆっくり回しドアを開け中を覗く、目を見開き固まるジュン、心臓の鼓動が速くなる。

○大空（昼）

目を見開くジュン、澄み切った青空を落下している。

ジュン「（絶叫）：ぎゃあああああ！」  
スカイダイビングスーツを着てゴーグルをかけているジュン、パニック、背中が刺さっているインストラクターが「慌てないで！もっと楽しみましょう！」とアドバイスするが、  
ジュン「（泣き喚く）やだあああああ！」  
落下していくジュン、カットアウト。

○高速道路（深夜）

目を見開くジュン、猛スピードで疾走するバイクの後部にまたがっている。

ジュン「え、え？！何？誰？」  
ライダーは黒い服装の女性、ヘルメットで顔は見えない、ジュンはその女の腰にしがみついている。

ジュン「（女に）と、止めて止めて！」

エンジン音で女には聞こえない。

ジュン「（更に大きな声で）止めてえ！」  
勘違いしたのか女は身振りでOKと言

うと更にスピードを上げる。  
ジュン「（泣き喚く）ひいひいひいひい！」  
カットアウト。

○ボクシングジム（昼）

目を見開くジュン、ボクシングのヘッドギアとグローブを着けリングの上立っている自分に気づく。

ジュン「：え：？」

劣勢だったらしい目の前の練習相手の右ストレートがジュンの眼前に迫る。

ジュン「また？！」

ジュンの顔に思い切りヒット、ゆっくり倒れる、カットアウト。

○遥香のマンション・居間（昼）

目を見開くジュン、遥香やその家族らしき人が皆ジュンを見ている、何かのパーティー中らしい。

ジュン「：え：！」

遥香「（状況を察し）あ、笠原君ちよちよつとこつちこつち（廊下に連れ出す）」

○遥香のマンション・廊下

遥香「（小声で不機嫌そうに）：なんて間の悪い男なんだろ」

ジュン「：えつと：何が何やら：」

遥香「（早口で）あのね今日は妹の誕生日なの、純也君がうちに来てくれて盛り上げてくれたから親もハッピー妹もハッピーいも友もハッピーもちろん私も超ハッピー：だったのに」

ジュン「すみません：僕も色々ありすぎてまだ受け止めきれなくて：」

遥香「あー純也君突然『そういえばスカイダイビングってした事ないなー』とか言い出してね。純也君いい所でキミと交代して残念がってたよ」

ジュン「そうだったんですか：」

遥香「：つーか仕方ねえな、キミで我慢しと



くか。純也君演じてよ、頼んだよ」  
ジュン「：へ？　：なんで」  
遥香「さつき来たばっかなのに純也君が帰る  
ってなったらみんなテンション下がるっし  
よ。空気悪くなるっしょ」  
ジュン「いや：でも無理ですよ：」  
遥香「キリっとした顔キープしてりや大丈夫  
だよ。自分に自信を持って。がんばっ。さ、  
行こ（ジュンの手を引く）」  
ジュン「え：え：（困り顔）」  
遥香「（ジュンを睨み）キリっと！」  
ジュン「（慌ててキリっと）：はい」

○遥香のマンション

遥香家族（父母妹）ときこちなくもな  
んとか会話しているジュン、その様子  
を見て照れる遥香、酔っ払い踊り出す  
父を慌てて止める遥香、携帯でジュン  
と写真を撮ろうとしている母を止める  
遥香、勝手にプレゼントを開けている  
妹にキレる遥香、幸せそうな家族を優  
しい眼差しでじっと見つめるジュン。

○河川敷（夕方）

芝生に座っているジュンと遥香。  
遥香「まあ、なんとかうまくいったよ」  
ジュン「緊張しました：」  
遥香「キミの経験値も若干上がったんじゃない  
い？　なんか凜々しくなったよ」  
ジュン「：もう嫌ですから：無理ですから」  
笑う遥香、少し間。  
遥香「：あの：こないだはごめんね」  
ジュン「：：？」  
遥香「あーいやいや、謝罪とかそういうんじ  
やないんだけどね：ほんのちよっぴり言い  
過ぎちゃったかなあとか思ったりしてね。  
：反省してるよ」  
ジュン「：でも二宮さんが言った事は事実だ  
し」  
遥香「だよね？　謝る必要ないよね？」

ジュン「……」

遥香「まあでもあれは私の本心だよ。キミにはもうちよつと頑張つて貰いたい。だって聞いたよ、キミたち融合するかもしれないって」

ジュン「そうなんです：僕がまだ迷つてて」  
遥香「純也君は融合したいって。私的には純也君の顔がほんの少しでもヘナチョコになつたら嫌だけど：でも純也君がそう望んでるんならそれでもいいかなって」

ジュン「……うん」  
遥香「（少し暗い表情で）：純也君はさ、あの日突然生まれたからある日突然自分が消えてしまうんじゃないかって：そんな風に考えてる：そんな気がするの」

ジュン「……」  
遥香「だからいつ消えてもいいように他人とは深く付き合わないんじゃないかな：」

ジュン「……」  
遥香「私：純也君とちゃんと付き合いたい。ちゃんと向き合いたい。だから：純也君の不安を消し去ってくれたら嬉しい」

真剣な眼差しで遥香を見つめるジュン。

遥香「（ドキッと）：純也君かと思つた」

ジュン「（苦笑）：純也と二宮さんって何となくですけど合うような気がします」

遥香「（照れて）え：そう？」  
ジュン「応援しますよ」

遥香「……ってなんでキミが上から目線なの。いっちばん上が純也君で真ん中くらいが私で笠原ジュン、キミはいっちばん下なんだからね、下の下の下なんだからね。勘違いしないでよね」

ジュン「……」  
遥香「まあ：頑張るわ。でもさ、キミは好きな人とかいないの？ いないよね？ それってかなり面倒だからね」

ジュン「（少し間）：いません」  
遥香「いるな。誰？ どんな人？ おばちゃんに言つてごらん？」

ジュン「（焦り首を振り）ほんとにほんとに  
：というか：今は恋愛とかしてる場合では  
なくて：僕自身を変えてかなきゃいけない  
時なのかなとか思ってた」

遥香「ふーん」

ジュン「（少し考え）：僕は自分の事が嫌い  
です：卑劣で姑息でどうしようもない」

遥香「：：」

ジュン「（自分に言い聞かせるように）：誰  
かが助けを求めてて：自分なんかには何も  
できないかもしれないけど：それでも何か  
しなくちゃダメなんだと：思うけど：思う  
んだけど：」

遥香「：：」

ジュン「：変わりたい：強くなりたい：」

遥香「：そっか」

ジュン「：ごめんなさい：突然こんな話」

遥香「ヘナチヨコなりに色々考えてんだねー。  
でもさ悩み苦しんでるってことは前に進ん  
でるってことでもあるんじゃない？」

ジュン「：（顔を上げる）」

遥香「逃げてないよ、今の笠原ジュンは」

微笑むジュン。

○大学・学食（昼）

難しそうな本を開きメモを取りつつ御  
飯を食べている綾乃、その目の前に制  
服姿のジュンが現れる。

綾乃「（驚き）えっ？　びっくりしたー」

ジュン「最近ゆっくり話してないなーって思  
って。今朝も綾乃さん早くに出ちゃったし。  
でも忙しそうだね」

綾乃「（ジュンに見せないように本を閉じ片  
付けつつ）ううん、終わったところから大  
丈夫（微笑む）」

ジュン「そう、よかった」

○同・並木道

歩くジュンと綾乃。

綾乃「：そういえばうちにちよつとあやしげ

な風貌の刑事さん来なかった？」

ジュン「：ああ来たよ」

綾乃「松村さんって言うんだけどね、あの人はあの事件の頃から色々とお世話になっててね。：ジュンのお父さん、失踪した翌日にATMのカメラに写ってたから事件性はないって警察は判断したでしょ：本人の意思で失踪した場合警察はちゃんと調べてくれないらしいの。でもあの人に調べてくれって何度も頼み込んで：ずっとずっと不安だったから：」

ジュン「：：」

綾乃「そしたら松村さん、情報関係の部署に知り合いがいるから何か情報が入ったら教えてくれるって言うてくれて。それでときどき報告しに来てくれたの」

ジュン「そうだったんだ：」

綾乃「黙っててごめんね。へんな心配させちゃったらアレかなって思ってた：」

ジュン「ううん、話してくれてありがと。ちよっと心配だったから」

微笑む綾乃、少し間。

ジュン「あのね：僕：」

綾乃「：？」

ジュン「：純也と融合しようかと思ってる」

綾乃「（驚き）：えっ？」

ジュン「それでみんなが：少しでもいいから幸せになればいいかなって：僕も純也も

：綾乃さんも：」

綾乃「ジュン：（涙ぐむ）」

ジュン「：僕も変わらないと」

綾乃「（涙が零れ）：ありがと：」

微笑むジュン。

綾乃「ブレザー似合うよね、ジュンも」

ジュン「（照れる）：そうかな」

○ 大学病院・トイレ個室（昼）

便座に座りスマホで撮影中のジュン。

ジュン「（小声で）：なかなか一人きりになれなかったから：こんな所でアレだけど：

これから融合のための注射をしに行きます  
：僕と純也がそれぞれ5回ずつ打つんだけ  
ど今日は1回目：って純也に説明する必要  
ないか：」

誰かがトイレに入ってくる。

ジュン「（更に小声）：ちよっと緊張してる  
けど：行ってくる（撮影を止め勢いよく立  
ち上がる）」

○同・研究棟・処置室

落ち着いた雰囲気の一部屋、窓から東京  
タワーが見える。

リクライニングシートに横たわってい  
るジュン、計測器を準備している綾乃、  
ジュンに心電図等の器具を取り付けて  
いる看護師、ジュンを撮影しているカ  
メラもある、そこに篠田がやって来る。

篠田「（笑顔でジュンに）どう？ 調子は」

ジュン「：まあまあです」

篠田「すぐ終わるから。ニンク注射みたい  
なものだよ」

ジュン「：ニンク：？」

篠田「（ふふふと笑い処置室の隣りの研究室  
の鍵を指紋認証で開け）薬、こつちに厳重  
に保管してあるんだ。国内での使用は今回  
が初めてだからね（隣りへ行く）」

ジュン「（少し心配）：」

それを察しジュンの肩に手を置く綾乃。

篠田「（保管庫の鍵を開けつつ）海外ではご  
く少量ずつの投与で副作用が起きたケース  
はないから心配する必要はないよ」

ジュン「：はい」

小さな瓶を持ってくる篠田、瓶から注  
射器に注入、それをチラッと見る綾乃。

篠田「じゃ始めるか」

ジュン「：（頷く）」

ジュンの横に座り腕を消毒する篠田、  
ジュンの腕に注射針を刺す、薬が投与  
され始める、それをじっと見つめるジ  
ュン、記録を取っている綾乃。

篠田「痺れや痛みはない？」  
ジュン「：大丈夫です」

篠田「（満足そうに微笑み）薬の効果はすぐに現れる場合もあるしそうでない場合もあるんだ。とりあえず一晩様子を見るから明日まで病院にいて貰うよ」

ジュン「：はい」

篠田「（注射針を抜き絆創膏を貼る）さて、終わった、御苦労さん」

ジュン「えっ：もう終わりですか」

篠田「だからニンニク注射みたいだって」

綾乃「気分はどう？」

ジュン「うーん：特に」

安堵する篠田と綾乃、起き上がろうとするジュン、体がビクつとする、緊張が走る篠田と綾乃。

綾乃「：ジュン？」

ジュン「：ん：発作かな」

篠田「ゆ、ゆっくり呼吸して」

ジュン「：大丈夫です：なんといいか：そんなに嫌な感じはしないです：」  
体がビクつとするジュン、目を見開く。

○神社・境内（夕方）（回想）

制服純也と遥香が石段に座り口づけしている、唇を離す純也、顔が赤い遥香。

純也「さて、帰ろうか」

遥香「：え、もう？」

純也「（意地悪く）どうする？」

遥香「（恥ずかしい）：うーん」

純也「帰ろう」

遥香「（首を振る）純也君：意地悪：」  
微笑む純也、遥香を抱き寄せ口づけ。

○大学病院・研究棟・処置室

顔が赤いジュン、少し困惑と興奮。

篠田「どうした？大丈夫か？」

ジュン「：なんだろ：今の」

綾乃「：ジュン？どうしたの？」

ジュン「（ビクつとし）あ：まただ」

○ 同・心療内科診察室（回想）

篠田（32）「（笑顔）はじめまして」

興味深げに本棚の本を見ていた純也

（11）が振り返る、キリっとした顔。

純也「よろしくお願いします」

制服姿の綾乃もお辞儀をする。

篠田「名前：なんて呼べばいいかな？」

純也「ジュンでもいいですけれど混乱します

よね。（少し考え）ジュンは6月生まれだ

からジュンでしたよね。僕は7月に生まれ

たから：ジュライでいいですよ」

篠田「なるほど：」

純也「って冗談です。名前っぽくないですか

ら今のは却下です。別のにしましょう」

篠田「（苦笑し）そうだね。じゃあとりあえ

ず純也君って呼んでもいいかな？」

純也「ええ、もちろん。突然いなくなる可能

性もありますから凝った名前は必要ありま

せんよね。それでいいです」

○ 同・研究棟・処置室

ジュン「：ジュライ：？」

篠田「（興奮気味に）：そ、それは恐らく純

也君の記憶だ：凄いぞ！ 早速薬の効果が

現れ始めたんだ！」

ジュン「：純也の記憶：」

ジュンをじっと見つめている綾乃。

篠田「二人の心の壁が崩れ始めたんだ：記録

しとかねば：」

ジュン「これが：融合：（ビクっとする）」

○ ブラジル・リオ・スラム街

涙を堪えゴミ捨て場に立っている純也。

純也「（呟く）： Meu papel acabou :」

○ 大学病院・研究棟・処置室

ジュン「： Meu papel acabou : :」

綾乃「：どうしたの？」

ジュン「：ブラジルの記憶かな。純也が何か





目を見開くジュン、席に座っている。

ジュン「(スマホを見て)3日経ってる！」

スマホの動画をチェックするジュン。

動画の純也「俺も昨日1回目の注射を受けたよ。篠田先生、ニンニク注射みたいだから大丈夫って言ってたけどきつとあれ君にも言っただろ? (苦笑)」

純也の顔をじっと見るジュン。

純也「俺も君の記憶を少し経験したよ。君が部屋でゲームをしている所とか君がソファで漫画を読んでいる所とか君が姉さんの寝顔をじっと見つめてる所とか――」

慌てて動画を止め周りを見るジュン、誰もいない、再び動画を再生させる。

純也「(笑い真顔になり)君も色々と思いついたみたいだね。どの記憶だろ」

ジュン「……」

純也「欠けてたピースが埋まってく感じで心地良いね。でも……すべてを知る必要なんかあるのかな……とは思うよ」

ジュン「(眩く)すべて……」

遥香「(後ろから)わ、純也君だ。見せて見せて(スマホを取り上げる)――」

ジュン「ちよ、ちよっと……」

遥香「(座り)これで近況報告し合ってるんだよね。てかデート中に交代すんなよ、笠原ジュン。空気読め」

ジュン「……すみません」

遥香「てか融合うまくいきそ? どんな感じ?」

ジュン「純也の記憶がさつと頭をよぎる感じが何度かあって……うまくいきそうです。そのういえば二宮さんも出てきましたよ」

遥香「えっ」

ジュン「神社の記憶とか……学校の記憶とか……ホテルの記憶とか」

遥香「ええっ?!」

ジュン「冗談です(微笑む)」

遥香「……殺す」

ジュン「……あの、純也っていつも何してるん

ですか。どこかに出かけたりとか、誰かと  
会ってたり：とか」  
遥香「純也君？ 実は私もよくわかんないん  
だよ。仲良くなつてからまだ間もないし。  
まさか女と会つてたり：。てか笠原君つて  
さ、ちよつと変わったよね」  
ジュン「ん？ 僕が？」  
遥香「なんかこう話し方とか：表情とかが。  
：ちよつと純也君っぽい」  
ジュン「そうかな：」  
遥香「おっと隠しフォルダ発見♪ えっちな  
写真だったりして。ぐへへ」  
ジュン「ちよ：それは見ちゃダメですよ」  
無視してフォルダを開く遥香、そつと  
覗くジュン、一枚の写真が入っている、  
笠原家の居間に飾つてある写真と同じ  
写真である、ジュンと綾乃の浜辺での  
幸せそうなツーショット写真。  
遥香「なにこれ（ガツカリ）」  
ジュン「あー：親が再婚した後家族でよくこ  
の浜辺に行つたんです：その時のだ」  
遥香「これキミ？ 隣りはお姉さん？」  
ジュン「僕と姉です。まだ純也が生まれる前  
だったし。：なんか楽しかったです。穏や  
かで、笑顔が絶えない毎日でした：」  
遥香「そんな写真をなんで純也君が」  
ジュン「なんでだろ：」  
写真を見ながら何かを考える遥香。  
遥香「お姉さん凄く綺麗な人だね。付き合つ  
てる人とかいるの？」  
ジュン「：そんな感じのいないかと：」  
遥香「周りの男がほつとかないでしょ」  
ジュン「：どうだろ：今まで付き合つた事な  
いんじゃないかな」  
遥香「（呆れ）シスコンの弟に男の話なんか  
しねーよ。お姉さんだつてね、キミに見せ  
てるのなんてほんの一部なんだよ？」  
ジュン「：そうかな」  
遥香「誰だつてそう。みんなそうやって生き  
てるの。（デザートが3皿席に届き）私が

大食いってのも純也君は知らないし」

ジュン「……体がビクつと」

遥香「あ……純也君に？」

ジュン「……うん」

遥香「ちよちよつと待って、これ片付けちゃ

うから（慌ててパフェを食べる）」

ジュン「……」

意識を失うジュン、カットアウト。

○ 大学病院・研究棟・処置室（昼）

目を見開くジュン、清掃員の格好をして誰もいない処置室の隅に立っている。

机の上に飲物が二つ、誰かがいた気配。

ジュン「……あれ……？　なんで……」

○ 同・研究棟・廊下

廊下に出るジュン、会議室から何やら話し声が聞こえる。

○ 同・研究棟・会議室

ドアを少し開け中を覗くジュン、薄暗い室内、会議室前方ではプロジェクトを使いつつ何かの説明をしている篠田が、いる、それを聞きながらノートを取っている若い医師や学生、綾乃もいる。中に入り隅の席に座るジュン。

篠田「次の症例です。この患者は11歳の時に解離性同一性障害の症状が現れました。非常に稀なケースで副人格は自立心が強く社会適応能力もありますが主人格は社会性や社交性の欠如が見られます」

ジュン「……」

篠田「6年近く安定していましたが8月頃から不安定期に入りました。人格崩壊の可能性も考えられたため4日前からこの患者にERTαの投与を開始しました」

ジュン「……」

篠田「（画面を差し）投与量や投与前投与中投与後のデータはこのようになっていきます。現在記憶の交差が顕著に見られているので

今後も注意深く経過観察して行きたいと思  
います。えー、何か質問は？」

学生A「（手を上げ）投与後患者に記憶の混  
濁はありますか？」

篠田「夢や願望やTV映像などが影響し自身  
の記憶と混乱したケースが海外で数例あり  
ますが時間の経過と共に落ち着くものと考  
えられます」

学生B「今回の実験が成功すれば日本初でし  
ょうか？」

篠田「それはあまり意味のない事だとは思  
いますが、まあそういう事になりますね（ま  
んざらでもない）」

綾乃「ERTaを一度に大量投与した場合、  
患者に与える影響はありますか？」

ジュン「……」

篠田「過剰投与したケースが海外で3例あり  
ます。数値は100 $\mu$ gから150 $\mu$ gです。  
その結果：3例とも投与した際に覚醒して  
いた人格が喪失しました」

ジュン「：そうしつ……」

淡々とノートを取っている綾乃、手元  
には学食で読んでいた本がある。

綾乃「その場合、その状態は何年も続くので  
しょうか？」

篠田「まだそこまでのデータがないので断言  
はできませんが数十年、もしくは一生続く  
ものと考えられます」

ジュン「（動揺）……」

綾乃「喪失した人格は完全に消えてなくなら  
ないのですか？」

篠田「人格が完全に消える事はありません。  
心の：脳のどこかで生き続けます」

ジュン「……」

篠田「（腕時計を見て）おっとこんな時間。  
この続きはまた今度ね（手で挨拶）」

学生がブラインドを明け電気を点ける。

篠田「（ジュンに気づき）：あ、ジュン君。

今丁度ジュン君の話をしてたんだよ」

ジュン「：こんにちは」

綾乃もジュンに気づき一瞬動揺する、  
が笑顔になり近づいて来る。

ジュン「（綾乃をチラッと見て篠田に）……い  
ま純也と交代したばかりで……」

篠田「人格融合のデータを見に来たのかな」

綾乃「純也、今日は病棟の清掃バイトって言  
ってたのに……さてはサボったな」

ジュン「……そうなんだ」

綾乃「これから先生と食堂に行くけどジュン  
も一緒にどう？」

ジュン「（首を振り）……ううん……帰るよ」

綾乃「……そう」

篠田とチラッと目が合う綾乃。

○同・病棟・廊下

元気なくトボトボと歩くジュン。

奈央「（後ろから）ちよっと純也君、どこ行  
ってたのー捜したんだから」

ジュン「……ごめんなさい」

奈央「あ、もしかしてもう一人の純也君？

聞いたよ。こないだバイク乗ってるとき一

瞬入れ替わったんだって？　ごめんねー飛

ばしすぎちゃって（笑う）

ジュン「……えっ（驚く）」

○同・病棟・中庭

座りお茶を飲んでいるジュンと奈央。

奈央「こう見えて飛ばし屋だから。行きたい  
ところがあつたら言っただけ」

ジュン「うーん……特には……。純也はよく乗せ  
てもらってるんですか？」

奈央「ううん2回だけ。こないだの高速かつ  
とばしと夏の群馬小旅行だけよん♪」

ジュン「……群馬？」

奈央「うん、なんかねここに刑事さんが来て

何やら話をしてね、そしたら純也君慌てた

様子になって。詳しくは教えてくれなかつ

ただけどね、ずっと捜してた人がみつか

ったかもしれないって。急いでるからバイ

クに乗せてくれって」



純也は徹にメスを振り下ろす。  
後ろから純也に抱きつき止める綾乃。

綾乃「：もういいの：」

純也「（呼吸が荒い）：：：」

隙を見て診察室から逃げ出す徹。

綾乃「：ありがと：ありがと：」

次第に落ち着いてくる純也、顔からは

狂気が消えジュン（11）の顔になる。

綾乃「：ジュン：？」

目の前の状況が理解できないジュン、

体に付いた返り血や手の中のメスに気

付き驚き投げ捨て震え出す。

ジュン「（綾乃を見て）：何が起きたの：」

綾乃「（ジュンを抱き締め）大丈夫：お父さ

んは突然おかしくなってメスを振り回して

自分で自分を刺して逃げ出したの：だから

ジュンは何も悪くない：大丈夫：」

ジュン「：うん：」

外でパトカーのサイレンが聞こえる。

○群馬・掘っ立て小屋・室内

ジュン「（呆然）：：：」

体がビクつとするジュン、目を見開く。

○同・掘っ立て小屋・室内（回想）

徹「（かすれ声で）：ジュンか：」

純也「：：：」

徹「：会いたかった：会ってジュンに：綾乃

ちゃんに謝りたかった：」

純也「：：：（握り拳が震える）」

徹「：本当に：すまなかつた：」

純也「ふざけんな！何を今更！」

徹「：謝って：済む事じゃないね：」

純也「じゃあ早く死ね！」

老いた徹の胸倉を掴み体を揺する純也。

純也「苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで死

にやがれ！」

苦しそうに咳き込む徹。

純也「（苦々しく手を放し）：くそっ：」

呼吸が乱れ肩で息をする純也。

徹「：すまなかつた：（涙が零れる）」

純也「（少し落ち着き）：あなたを許す事はない：一生許さない：ただ忘れようと思う：自分の中から消し去る：」

徹「：：：」

純也「：あなたが死んだら遺灰は捨てる：掃き溜めに投げ捨てる：すべてが消え：それで終わりだ：」

徹「（安堵の表情で大きくゆっくりと頷く）：ありがとう：」

○同・掘っ立て小屋・外（夕方）

呆然としながら歩くジュン、立ち止まり振り返り小屋をじっと見つめる。

○警察署前の喫茶店（昼）

座っているジュン、そこに松村が来る。

松村「よっ、可愛いジュン君（微笑む）」

× × ×

松村「8月の中頃にあの小屋の近くでホームレスがぶっ倒れててね。病院に担ぎ込まれたんだけどすぐにいなくなっちゃったんだ、末期癌だったんだけどな。で、そんなときの病院の記録とジュン君のお父さんの特徴が：背格好やら男性器が切断されてるとこやら：がよく似てたんだ」

ジュン「：：」

松村「そういう情報が俺んどこに来たからもう一人の君に教えたんだ。元々は綾乃ちゃんに頼まれてたんだけどね、自分はもう大人だし父とは血も繋がってるからまず自分に教えろってうるさくてね」

ジュン「：：」

松村「でまあ会いに行ったらいいんだ。けど、全くの別人だったって。だから綾乃ちゃんにも言うなって。：ほんとかな」

ジュン「：：」

松村「そのあとすぐに男は小屋で病死したらしい。で身元不明のまま処理されたんだがなぜか遺灰が盗まれた。物好きがいるもん



だね」

ジュン「……」

松村「ま、身元不明人の遺灰盗難なんてのはどーでもいいんだが、ちよいと気になったんで病院の記録を改めて調べてみたんだよ。そしたら……（意味深に笑う）」

ジュン「……なんですか」

松村「なるほどね。すげえな、ほんと狂ってるよ。でもそこがまた……」

ジュン「……？」

松村「……まあそんなとこだ。さて仕事に戻るかな。公務員は忙しいぜ。んじやな」

ジュン「……ありがとうございます」

松村「……しっかしジュン君も大変だね」

ジュン「……？」

松村「ジュン君だけだよ、まともなのは」

ジュン「……」

去る松村、体がビクつとするジュン、カットアウト。

○ボクシングジム（夜）

目を見開くジュン、ジムには他に誰もいない、心地良い汗と呼吸のジュン、目の前のサンドバッグが揺れている。体がビクつとするジュン、目を見開く。

○ブラジル・リオ・スラム街（回想）

様々なゴミが散乱し悪臭が漂っているゴミ捨て場、鞆からビニール袋を取り出し封を開ける純也、無表情に袋を逆さにし灰を撒く、少しずつ少しずつ灰が落ちていく、次第に苦しげな哀しげな顔になり力任せに袋をゴミの上に叩きつける、涙を堪えじつと耐える純也。

純也「（呟く）…… Meu papel acabou ……」

ブラジル娘「（ポルトガル語）（後ろから）純也！ いつまでこんなとこにいるの？」

一呼吸置いて笑顔で振り返る純也。

純也「（ポルトガル語）待たせてごめーん、

いま行きまーす、運転手さん」

娘の後ろにはタクシーが止まっている。

娘「早く早く！海連れてったげる！」

服をチラッと脱ぎ水着を見せる娘。

純也「おおお素晴らしい！行こう！」

○ボクシングジム

ジュン「（驚き）：だからブラジルに！」

サンドバッグがまだ揺れている。

ジュン「：あいつ凄いな！」

サンドバッグを打ってみるジュン、う

まくヒットせず、もう一度打つ、ちょ

っとヒット、もう一度、更にもう一度、

段々調子が出てくるジュン、楽しくな

る、純也が乗り移ったかのような真剣

な眼差しで打ち続けるジュン。

○笠原家・二階・居間（夜）

中をそつと覗き込むジュン、部屋は暗

く誰もいない。

○同・二階・廊下

自分の部屋に入ろうとするジュン、部

屋から綾乃が出てくる。

ジュン「（驚き）綾乃さん、いたんだ」

綾乃「ホチキス借りるよーん。おかえり」

ジュン「うん：ただいま」

綾乃「大丈夫？頻繁に交代してるみたいだ

けど」

ジュン「うん、大丈夫。少しずつ純也と近づ

いてるよ」

綾乃「：そう」

ジュン「綾乃さん：ちょっと話があるんだけど

ど」

○同・二階・居間

ソファに座っているジュンと綾乃。

綾乃「（驚き）：そうだったの：ジュンのお

父さんが！」

ジュン「多分純也は落ち着いてから話すつも

りだったんだと思うよ、僕達には」

綾乃「そうね：」

ジュン「あいつは一人で何もかも背負い込みすぎだよ：」

綾乃「（頷き）：これですべてが終わったのね：」

ジュン「うん」

綾乃「でも：それでブラジルまで行くなんて：ほんと純也は馬鹿野郎ね（微笑む）」

ジュン「（微笑み）わざわざポルトガル語まで勉強してね。でも融合のおかげか僕もポルトガル語なんとなくわかるようになってきたよ。Meu papel acabou：つてのがまだよくわからないけど：なんだろ」

綾乃「（呟くように）：一回目の治療でそこまで効果が：」

ジュン「：？」

綾乃「順調ね。良かったじゃない」

ジュン「（頷き）：ただまだ曖昧な所も多いんだ」

綾乃「：？」

ジュン「：ちよつとはつきりしないのは：父さんを刺したのは僕：なのかな」

綾乃「（少し暗い表情になり）：私はある夜の話をするのは苦痛なの：だからジュンにはあの時の記憶がないままでいてほしかったし：無理に思い出させる必要はないと思つてた：それはわかつて」

ジュン「もちろん：ただ：本当の事が知りたいたと言うか」

綾乃「（少し冷たい言い方で）ジュンじゃない。：私を助けてくれたのは純也：あのと純也が生まれたんだから」

ジュン「：：」  
綾乃「あの人死んで終わった事だから、この話はもうやめましょ」

ジュン「：うん」

綾乃「（呟くように）これから新しい人生が始まるんだから：（明るく）もうちよつとで大学のほうも落ち着くから久しぶりにあ

の海に行こっか？（棚の写真を見る）  
ジュン「（笑顔）えっ？ 行こ行こ」  
綾乃「次の治療は金曜だっけ。そのあとぐら  
いに行けたらいいね」  
ジュン「（微笑み）そうだね」

○同・二階・風呂

洋風な浴室、浴槽に入っているジュン、  
スマホのジュンと綾乃の写真をぼんや  
りで見つめているジュン。  
ジュン「（呟く）すべてが終わった：」  
若干の不安を抱えた表情のジュン、ス  
マホを操作し色々な動画を見始める。  
動画の純也「えっと：ちゃんとした動画は初  
めてかな。少し照れるね。でもこういう交  
流も必要だと思うんだ。これからもよろし  
くね、本物の俺（微笑む）」  
別の動画を再生するジュン。

○お洒落な喫茶店（深夜）純也の動画

純也「（テーブルの上に本10冊程）小声  
で）秋の夜長っていうけれど、せいぜい5  
冊だよ、一晩に読めるのは」  
周囲の客を写す純也、壁の時計は2時、  
気だるい空気分、スマホを見ている客、  
勉強している客、寝てる客、色々いる。

純也「みんなどんな人生歩んできたんだろ。  
でも色々あって今はここにいて、時間と空  
間が重なり合ってるんだ。奇跡だよ。ジュ  
ン、意味がわからないだろ？ 俺もだ」

○笠原家・二階・風呂

失笑して別の動画を再生するジュン。

○同・二階・ジュンの部屋（純也の動画）

純也「（困った感じ）参ったね：参ったよ：  
（センスの悪いセーターを写す）：どうす  
る？ どうしてくれよう？ この姉さんか  
らのクリスマスプレゼント：ジュン：お願  
い：できるだけだけ着て：自分はちよつと耐え

られない：このセンス：」

綾乃の声「（廊下から）着てみた？ どう？

いいでしょー」

純也「：こういうの欲しかったんだー、姉さんありがとー（若干棒読み）」

○同・二階・風呂

笑って別の動画を再生するジュン。

○高校・廊下（朝）（純也の動画）

純也「（小声で）えー：初めての高校っす：

教室はここかな：俺のロッカーはここか：

（生徒が近くを通り若干緊張）：うわっドキドキする：でもすげ楽しい：（怪訝そ

うな顔で遥香が横を通る）あ、ども、おは

よ。（遥香無視して去る）：え：もしかして

ジュンって：嫌われ者？ （苦笑）」

○笠原家・二階・風呂

苦笑して別の動画を再生するジュン。

○野原（昼）（純也の動画）

爽やかな風が吹いている、芝生の上に

寝そべっている純也、青空を写す。

純也「：綺麗だね：君との交代が不安定にな

ったからこそ見ることができるようになっ

た景色だね：ほんと綺麗だ」

自分を写す純也。

純也「：こうして空を見上げてみると空に：

宇宙に吸い込まれてしまいそうだね。宇宙

か：人類はこの先どこまで行けるのかな：

火星にすら到達できずに人類は朽ち果てて

しまう：そんな気がする。人の脳味噌はあ

まりにも小さく：人の一生はあまりにも短

い：。だとしたら今俺達人類がしている事

ってなんだろうね。ほとんどがどうでもい

い事のような気がする：意味がないような

気がする。：俺は：（動画終わる）」

○笠原家・二階・風呂

スマホをじっと見つめているジュン、  
体がビクッてする、カットアウト。

○ 大学病院・研究棟近く・中庭（昼）

目を見開くジュン、木陰に立ちラジオ  
の様な機械を持ちイヤホンをしている。

ジュン「ん？（イヤホンを外す）」

遥香「（現れ）あっ、いたいた！ ……ってじ  
やないほうか？ ったく（苛々）」

ジュン「すみません：何かあったんです  
か？」

遥香「うーん：最近の純也君、ちょっと様子  
がおかしくてね。連絡も取れなくて」

ジュン「どうしたんだろ：最近融合以外は  
特に忙しくないはずだけど」

遥香「会いたかったからあちこち捜したんだ  
よ：ジムやら学校やら」

ジュン「様子がおかしいってどういう：」

遥香「：こないだのスカイダイビングもそう  
だけどさ：純也君：なんかやり残した事を  
やってるような気がして」

ジュン「：やり残した事？」

遥香「バイクで疾走したり私に本を返してく  
れたり：ボクシングジムも辞めたんだって。  
なんか身辺の整理をしている様な：」

ジュン「：そんなこと：」

遥香「こないだファミレスでキミと交代した  
後一緒に帰ったんだけどさ、帰り際ギョッ  
て抱き締めてくれて：いつもそうしてくれ  
るんだけどその日は：なんか：なんか：い  
つもとちよつと違った」

ジュン「：：：」

遥香「大丈夫かな：純也君：（急に明るく）  
って思っって純也君捜しにここに来たんだけ  
どね、さっき食堂でお姉さんにばったり会  
っちゃった」

ジュン「：綾乃さんに？」

遥香「純也君の事相談ついでに仲良くなっ  
ちやっ。ついでにアイスも奢ってもらっ  
ちやっ（ピースして微笑む）」



の着信がある、驚き電話を掛ける。

ジュン「：あの：」

綾乃の声「ジュンね。いまどこ？」

ジュン「どこだろ：今交代したばかりで」

綾乃「大変なの：篠田先生が：純也に殴られて救急搬送されたの」

ジュン「（驚き）：純也が？」

綾乃「うん：幸い先生は軽傷で良かったんだけど：どこの？：ジュン、何か持ってる？ 鞆か何かを」

ジュン「：鞆？ ううん、何も」

綾乃「：とにかくそこを動かないで。場所がわかったら知らせて。またあとでね」

ジュン「：うん：（切る）」

ジュンはスマホを操作するが動画はない、現在地を調べるジュン。

そこに車が猛スピードで近づきジュンの横に止まる、中から松村が出てきてジュンに近づく。

ジュン「な、なんですか」

ジュンの首根っこを掴むとそのまま車の助手席に押し込む松村。

松村「はい、ナントカ先生暴行の重要参考人確保っと。スマホの位置情報って便利だね、すぐわかった（乗り込む）」

ジュン「：逮捕ですか」

松村「いや、そうじゃない。色々あってね。あ、ジュン君じゃないよ、もう一人の野郎に用があつてね（車を動かす）」

ジュン「：純也に何を：」

松村「ちよつと話を聞きたいだけだ。それが終わったら帰すよ。ほんとにほんとに」

ジュン「：：」

○松村のアパート・前

松村「（車を止め）ささ、降りて降りて」

ジュン「：警察じゃないんですか：」

隙を見て逃げ出そうとするジュン、それを予期していた松村、回り込みジュンの腹を殴る、腹を押さえ呻くジュン。



松村「大丈夫？　車酔いしちゃった？」

ジュン「……」

ジュンの腕を掴んで連れていく松村。

○松村のアパート・部屋

ゴミや服や雑誌が散乱し汚く薄暗い。

ジュンは手を縛られ座っている、松村は暇そうに煙草を吸っている。

松村「（欠伸）早くあいつに交代してよ」

ジュン「……そんな自由にはできません……」

きたいことってなんですか……」

松村「（無視して）感情的になったりしたら交代するんかな？　あ、そうだ、いい事教えてやるよ」

ジュン「……？」

松村「いやね、俺あの事件のあった頃からずっと好きだったんだよ綾乃ちゃんの事」

ジュン「……」

松村「ま、そういう下心があつてお父さん捜しもずっと協力してたんだけどね、まあ綾乃ちゃんもそういう俺の気持ち知ってて利用してたんだけどね」

ジュン「……そんなこと……」

松村「最近ちよいと状況が変わってね。だから頼み込んでみたんだよ」

ジュン「……？」

松村「ヤラせてくれて」

ジュン「（驚愕）……なにを……」

松村「そしたらあっさりオーケーしてくれてビックリ。別にいいですって。そんなことでいいんですかって」

ジュン「……ふざけんな……」

松村「綾乃ちゃん、男いるじゃん？　不倫だけども誰でもいいんだねー」

ジュン「……」

松村「まあ俺的には滅茶苦茶嬉しくて嬉しくて。ずっと片想いだったからさ。だから思わず隠し撮りしちゃった。見る？　（ビデオカメラを見せる）」

ジュン「（固まっている）……」



○ 同・二階・ジュンの部屋

綾乃に少し背を向けベッドに横になつて  
いるジュン、心配そうにベッドの端  
に腰かけている綾乃。

綾乃「：純也の事なんだけど：」

ジュン「：うん」

綾乃「実はねあの子、私と篠田先生が付き合  
つてるって勘違いしたみたいなの」

ジュン「：：」

綾乃「既婚者の先生に私が遊ばれると思つ  
たらしくてカッとなつて先生を殴っちゃつ  
たらしいの」

ジュン「：：」

綾乃「近くにいた人が警察を呼んで騒ぎにな  
つちやつたんだけどね、篠田先生に事情を  
説明して警察沙汰にはならないようにお願  
いしたからそれは大丈夫」

ジュン「：そう」

綾乃「でも騒動になつて私パニックになつち  
やつたから知り合いの刑事に純也を捜すよ  
うに頼んじやつたの：そしたらこんな事に  
：何考えてんだろ：あの人」

ジュン「：：」

綾乃「（立ち上がり）ま、とにかく大丈夫だ  
から。安心してもう寝なさい」

ジュン「：うん：おやすみなさい」

ジュンをじつと見つめながら灯りを消  
しドアをゆっくりと閉める綾乃。

× × ×  
真つ暗な部屋でベッドに寝そべってい  
るジュン、寝ていない。

スマホを操作し撮影を始めるジュン。

ジュン「：前は：僕なりに穏やかな毎日だつ  
た：幸せだったように思う：」

辛そうなジュン。

ジュン「：でもそれって：周りの人の犠牲で  
成り立っていたのかな：僕はそれを：見て  
見ぬふりをしていただけなのかな：」  
苦しげなジュン。

ジュン「純也：何考えてんだよ：返事しろよ：言わなきゃわかんないだろ：」  
スマホを放り布団にくるまるジュン。

○同・一階・診察室（深夜）

目を見開くジュン、薄暗い診察室、診察用ベッドに座っている自分に気づく。  
背中から生白い腕が伸びジュンの体にまとわりつく。

ジュン「（固まり）：：：」

目の前の鏡を見るジュン、ジュンの背後には全裸の綾乃がいる。

綾乃「（ジュンの首筋に顔を埋め涙声で）：

お願い：お願い：純也：」

ジュン「：：：」

綾乃「私を：助けて：（ジュンを抱き締める）」

ジュン「（激しく動揺）：：：」

体がビクつとし意識を失うジュン、カッタアウト。

○同・二階・ジュンの部屋（昼）

ゆっくりと目を開けるジュン、ベッドで横になっている。

ジュン「（起き上がり）：夢：？」

○同・二階・居間

様子を窺うように居間に入るジュン、テーブルには朝食とメモがある、『純也へ 篠田先生のお見舞いに行ってください』ジュンへ『いっばい食べてね。後片付けはいいから。できたらでいいから：できたらで：笑』

ジュン「：：：」

× × ×

黙々と御飯を食べるジュン。

○同・二階・台所

黙々と皿を洗うジュン。

○同・二階・ジュンの部屋

黙々とゲームをするジュン、ゲームオーバー。

ジュン「（コントローラーを放り投げ大きく溜め息を吐き）……（立ち上がる）」

○同・一階・廊下

廊下の突き当たりのドアをじっと見つめるジュン。

○同・一階・診察室

恐る恐る診察室のドアを開けるジュン、カーテンが閉められていて薄暗い室内。ゆっくり中に入るジュン、室内を見渡す、診察用のベッドは皺もなく綺麗なまま、変わった様子がない室内、少し落ち着くジュン、ベッドに座ってみる。突然ポケットのスマホが鳴り驚くジュン、スマホを見ると綾乃からの着信。

ジュン「（少し深呼吸し出る）……はい」

綾乃の声「（無感情な声で）……純也？」

綾乃の声「……また後で掛けるね（切れる）」

ジュン「……」

ふと机の上の筆記具トレイを見るジュン、何か紙のような物を焼いた跡がある、大きめのひとかけらを拾うジュン。

ジュン「……？」

角度を変えてよく見るジュン、写真のようだ、人の顔の一部……変顔。

ジュン「（固まる）……これって……」

狂ったようにトレイを掻き回し燃え残っている紙を出すジュン、それを机の上になべて行く。

ジュン「……（目に涙が溢れる）」

半分も残っていないが棚に飾ってあった写真である、激しく動揺するジュン、呼吸が荒くなる、体がビクつとすする。

ジュン「……なんで……」

体が激しく震え意識を失う、カットア

ウト。

○松村のアパート・部屋（夕方）

目を見開くジュン、玄関近くに立っている自分に気づく、玄関横の風呂場からシャワーが流れる音が聞こえる。

ジュン 「：ここは：（体がビクつとする）」

× 「：ここは：（体がビクつとする）」  
診察室でぼーっと立っているパジャマ姿の綾乃（16）の後ろ姿。

ジュン 「：：：」

嫌な匂いに鼻を押さえるジュン。

ジュン 「：：：？」

引き戸が閉じられている居間のほうを見るジュン、床を見る、血のようなものが広がっている、ゆっくりと近づく。

ジュン 「：なに：（体がビクつとする）」

× 「：なに：（体がビクつとする）」  
16歳の綾乃の目の前で血まみれの股間を押さえ絶叫している徹。

× × ×  
呼吸が荒くなってくるジュン、引き戸に手をかけゆっくりと開ける、目を見開き固まるジュン。

部屋全体が血まみれ、内臓が飛び散り、人間らしき物体が横たわっている（一瞬写す）、カットアウト。

○さまざまな映像（記憶の混濁）

ホテルで初めて綾乃と会ったときのジュン、綾乃の笑顔が破裂し返り血を浴びるジュン、ブラジルで男達に囲まれナイフで切りつけられるジュン、何もつけずに大空から落下しているジュン、教室で下着姿の遥香に抱かれているジュン、バイクで疾走中転倒し投げ出されるジュン、対向車に轢かれるジュン、玄関で松村に銃を突き付けられるジュン、小屋で死にかけの徹に首を絞められるジュン

ン、診察室でめった刺しにされるジュン、刺しているのは純也。

○ 高校・廊下（夜）

目を見開き嘔吐するジュン、混乱した様子で息が荒い。

少し落ち着き周りを見る、静寂の校舎。

ジュン 「：ここは：」

目の前のロッカーが開いている、足元に何かの保管ケースが置いてある。

ジュン 「：：？」

ケースを持ち教室に入るジュン、薄暗い教室をぼーっと見る、机の上にケースを置き開ける、E R T α と表示された小瓶が10本以上入っている。

ジュン 「：：なんで：：」

体がビクつとする、カットアウト。

○ バス

目を見開くジュン、一番後ろの席に座り窓の外を見ている、膝の上にケース。

ジュン 「：純也：何してるんだ：」

体がビクつとする、カットアウト。

○ 道（深夜）

目を見開くジュン、保管ケースを持ちどこかの暗い道を歩いている。

ジュン 「：どこに行こうとしてるんだ：」

近くで潮騒が聞こえる、海の方を見るジュン、そちらへ歩く。

海が見えてくる、夜明けが近く空が徐々に明るくなってきた。

ジュン 「：ここは：」

体がビクつとする、カットアウト。

○ 浜辺（早朝）

目を見開くジュン、雲の合間から朝日が顔を出しジュンを照らす、目から涙が零れ落ちている自分に気づくジュン。

ジュン 「：：：」

棚の写真と同じ場所の流木に座っているジュン、足元には保管ケースがある。

ジュン「（涙が止まらず）……」

散歩中の両親と幼い姉弟が近くを通る、弟がジュンの涙を物珍しげに見るが姉がそれを注意する、慌てて涙を拭うジュン、弟が走り出し姉が追いかける、それを見て笑う両親、幸せそうな家族。

ジュン「……」

スマホを取り出すジュン、チェックすると動画がある、それを再生する。

動画の純也「（浜辺で撮影）：ジュン：（何か言おうとするが）……：（言葉にならない）……：（苦悶の表情）……：（動画を切る）」

ジュン「……純也……」

呆然としているジュン、後ろから、綾乃「ジュン」

驚き振り返るジュン、綾乃がいる。

ジュン「……綾乃さん……」

綾乃「（微笑み）ここ来るの久しぶりだね」

ジュン「……うん……」

綾乃「（ジュンの横に座り）……大丈夫？」

ジュン「……ちよつと……記憶が混乱して……」

綾乃「葉の影響かしら……混濁があるって」

ジュン「……そうだね」

綾乃「（少し間）……純也から連絡があったの……ここで待ってるって」

ジュン「……そう……」

綾乃「……あのね……純也のことでジュンに伝えてない事があったね……」

ジュン「……」

綾乃「……実は純也……この葉を使って自殺するつもりだったの……（ケースを見る）」

ジュン「（驚愕）……そんな……」

綾乃「この葉を過剰に摂取して人格を喪失……人格融合の話ジュンに勧めたのもこの葉を手に入れるためだったの。ジュンが融合に前向きになるように遥香ちゃんって子にもお願いしたそうよ」



ジュン「……なんで……」

綾乃「純也はね：父親が原因で生まれた自分は父親の死で消えるべきだって：そう考えたの……」

ジュン「……そんな……」

綾乃「：ポルトガル語に詳しい友達に聞いてみたの：『*Meu papel acabou*』って言葉を：そしたら：『自分の役目は終わった』って意味だ……」

ジュン「（呆然）……」

綾乃「嫌な予感がしたから純也のパソコンをこっそり調べてみたの：ジュンの部屋から私が出てきたときね」

ジュン「あのとき……」

綾乃「そしたら：E R T α 過剰投与に関する論文を調べた形跡があつてね：それでもまだ半信半疑だったけど病院で遥香ちゃんから聞いた話で確信したわ：純也の目的に愕然とした……」

ジュン「……」

綾乃「純也、病院の処置室に盗聴器を仕掛けて薬を盗む機会を窺つたの：でも自分の計画に私が気付いたことを知った純也は焦って先生を殴り薬を奪つた……」

ジュン「……それで……」

綾乃「何が何でも自殺を止めたかった私はあんな刑事にも頼んでしまったの：でもなんとか純也と話をすることができた」

ジュン「……」

綾乃「私は説得した：純也はこのまま生きていいんだよ：純也は消える必要ない：私にはあなたが必要：ジュンだってそれを望んでる：またみんな幸せに暮らそうよ……」

ジュン「……」

綾乃「そしたら：そしたらようやくわかってくれた：あの海に行こう：薬を持ってあそこで待ってるから……」

ジュン「……」

綾乃「篠田先生も理解してくれたからすぐに

でも融合は再開できるし：ジュンと純也と私：これからもみんな仲良く暮らしてこ？（微笑む）

ジュン「：そうだね：それがいいね」

ジュン「ジュンを引き寄せ抱き締める綾乃。」

綾乃「：懐かしいね、ここ」

ジュン「：うん」

綾乃「（眩く）あの頃は楽しかった：」

ジュン「（綾乃をチラッと見る）：：」

綾乃「（少し微笑み）帰ろっか」

ジュン「：うん」

太陽が鉛色の雲に覆われ空が暗くなる。風が吹き始める。

### ○バス

寄り添い座っているジュンと綾乃、ポツリポツリと雨が降り出す。

### ○笠原家・二階・居間（夜）

雨が降り続けている。

綾乃の手作り料理を美味しそうに食べているジュン、それを見つめる綾乃。

疲れからか徐々に眠くなるジュン、微笑む綾乃、目を開けようとするが開けられなくなるジュン、座ったまま眠る。

ジュンの口元に付いたソースを無表情に拭き取る綾乃。

### ○浜辺（昼）（回想）

晴天、流木に座っているジュン（1

0）と綾乃、離れた所で徹と弥生が歩いていて、変顔の綾乃と照れた変顔のジュン、綾乃がデジカメで自撮りする。

綾乃「（画像を見て）だめだめ、もーっと変な顔じゃなきゃ」

ジュン「：恥ずかしいよ：」

綾乃「恥ずかしいから楽しいんじゃない」

ジュン「：だって：」

綾乃「撮るよ？行くよー」

ジュン「：うん」

思いきり変顔をするジュン、普通に笑顔の綾乃、シャッターを押す、画像を見て大笑いする綾乃。

ジュン「ちよつと綾乃さんひどいよ！」

綾乃「（笑う）いい写真撮れたー。これは居間に飾んなきゃね」

ジュン「それだけはやめて！（デジカメを奪おうとする）」

綾乃「あはは（楽しげに逃げる）」

○笠原家・一階・診察室（深夜）

雨が激しく降っている。

ゆっくりと目を開けるジュン、動こうとするが動けない、診察用のベッドに縛り付けられている自分に気づく。

ジュン「：え：：：」

状況が理解できないジュン、体がビクッとする。

○同・一階・診察室（深夜）（回想）

純也「俺は姉さんを守るために生まれた：そしてあの男が死にその役目も終わった」

綾乃「：：：」

純也「：消えるべきなんだ」

綾乃「（動揺）：：：」  
純也「それでいいんだよ。だってこれはジュンの体だし、ジュンの時間だし、ジュンの人生なんだから」

綾乃「：いや：そんなの：（涙が溢れる）」  
純也「：ジュンは変わろうと努力してるよ、頑張ってる：だから：」

綾乃「：お願い：そんな事言わないで：」  
純也「（振り返ると綾乃は全裸になっている）：姉さん：」

綾乃「：私の気持ち：知ってるでしょ：」  
純也「（首を振り）：ごめん：」

綾乃「（純也の首筋に顔を埋め涙声で）：お願い：お願い：純也：」

純也「：：：」

綾乃「（純也を抱き締め）私を：助けて：」  
純也「（苦悶の表情）：：：」

○同・一階・診察室

ジュン「（目を見開き）：：：」

突然ドアが開き驚くジュン、綾乃が入って来る。

ジュン「：綾乃さん：」

綾乃は無視して何かの作業をしている。

ジュン「：綾乃さん？」

振り返る綾乃、冷たく無表情。

綾乃「おはよう。ジュン？」

ジュン「：なんで：」

綾乃「（作業を続け）ごめんね、もうじき警察が来ると思うから説明してる暇はないの。

（机の上の写真を見て眩く）あれ、目障りだから燃やしたのに（払いのけ薬の保管ケースを置く）」

ジュン「（混乱）：：：」

綾乃「ジュンね？」

ジュン「：そうだよ：」

綾乃「（満足そうに微笑み）確認完了。睡眠薬で寝てる間に交代してる可能性もあったからね（小瓶を何本も取り出す）」

ジュン「（薬を見て）：何を：」

綾乃「E R T aの過剰投与を実施します」

ジュン「：意味がわからない：訳がわからないよ：ねえ：綾乃さん：（狼狽）」

綾乃「（イラっとし手を止め）うるさい」

ジュン「（驚愕）：：：」

綾乃「：意味が分からないのは私の方：ジュン：あなた私に何をしてくれた？」

ジュン「（困惑）：え：？」

綾乃「あなたあの夜何をしてくれた？」

ジュン「（目を見開き動揺）：：：」

綾乃「ううん、あの夜だけじゃない：その前の朝も：その前の前の昼も：その前の前の夜も：あなた何もしてくれなかったじゃない：」

ジュン「（固まり）：：：」



その顔は純也、綾乃を庇いつつそのメ  
スを徹に突きつける。

純也「お前を：殺す」

綾乃「（我に返り純也を見て）：：：」

○同・一階・診察室

ジュン「（目を見開き）：：：」

綾乃「激しさを増す雨、作業を再開する綾乃。

：それでも私がこの家を好きなのは息子  
純也の生まれた場所だからよ」

ジュン「：：：」

綾乃「ジュン：あなたは知らないでしょ：純  
也のいない昼間が私にとつてどれ程無意味  
だったか：あなたと過ごす時間が私にとつ  
てどれ程苦痛だったか：」

ジュン「（震え）：そんな：僕にも：優しか  
ったじゃない：」

綾乃「冷たくして大切な純也の体を傷つけら  
れでもしたら大変だからねー」

ジュン「：：：」

綾乃「（小瓶を手に取り眺めながら）E R T  
αという薬に関する論文を見つけたときは  
興奮したなあ。純也の人格だけを残す方法  
があつたんだあ！　つて」

ジュン「：：：」

綾乃「純也がこの薬を使って自殺を考えてた  
つて話は本当よ。でも私も同じように考え  
てたの、この薬を使ってジュン：あなたを  
殺そうつて」

ジュン「（呆然）：：：：」

綾乃「篠田先生に人格融合の話をしてみたの。  
最初は乗り気じゃなかったけどね、何度か  
寝たらコロっと態度を変えたよ」

ジュン「：：：」

綾乃「（注射器を用意し）そう、融合なんて  
どうでも良かったの、この薬が欲しかった  
だけなんだから。ほんとは一回目の治療前  
に盗み出したかったんだけどね、先生なか  
なかガードが固くて。それに薬の効果もま



綾乃「（更に注射器に薬を注入しつつ）もちろん警察には捕まっちゃう。でも責任能力がなくて罪に問われないってこともあるよね。実刑でも情状酌量で5年かそこらで出てくれる。5年もすればまた純也に会えるんだよ？（微笑む）」

ジュン「：綾乃：さん：」  
二階で何か物音がする。

綾乃「（不快な顔で）クソッ、あの女か」  
ジュン「：：：？」

綾乃「保険で遥香って女をうちに呼んで眠らせてたの。純也が本当に協力してくれるのかまだわからなかったからね」

ジュン「二宮さんが：」  
綾乃「もう一度眠らせてくるね」  
ジュン「：：：」

診察室を出ていく綾乃、なんとか紐を解こうともがくジュン。

ドアがゆっくり開く、固まるジュン、遥香がいる。

ジュン「：二宮さん！」  
遥香「（口に指を当て）静かに」

紐を解き始める遥香、綾乃が二階を歩いていくらしい軋み音が聞こえる。

遥香「（紐が解け）よし、行くよ」

頷き立ち上がるジュン、が睡眠薬の影響かふらつとすると、ジュンを支える遥香、ゆっくりと移動し診察室を出る。  
長い廊下をゆっくりと歩く二人。

遥香「昨日純也君から電話があっってお姉さんには気を付けろって：だから出された飲み物飲まなかったんだよ」

ジュン「そか：二宮さん：ありがと：」  
遥香「（微笑み）ファミレスであんみつご馳走してね。その前に逃げなきゃ」

ゴンツという金属音がし遥香が崩れ落ちる、驚き振り返るジュン、金属バットを持った綾乃が立っている。

ジュン「：あ：あ：」  
無表情にバットでジュンの鳩尾を突く



綾乃、呻き倒れるジュン、ジュンを仰向けにし紐できつく縛る綾乃。

綾乃「（頭から血を流している遥香を見て）目障りな女：彼女ヅラしやがって」

遥香めがけてバットを振りかぶる綾乃。

ジュン「（目を見開き固まる）！」

綾乃「（バットを降ろし）ほんとは殺したいんだけどね、純也と約束しちゃったからな。まあでもこれぐらいはいいよね（遥香の腹を思い切り蹴る）」

ジュン「……」

診察室に戻る綾乃、小瓶数本と注射器を持つてくる。

淡々と注射器に薬を注入する綾乃。

ジュン「（恐怖に震え）……やめて……」

綾乃「もーちよつと待ってね」

遠くでパトカーのサイレンが聞こえる。雨が激しさを増す。

綾乃「（注射器に薬を注入し終え）さて」

注射器を持ちながらジュンの腰の上に跨る綾乃、抵抗するが動けないジュン。

綾乃「始めましょうか」

ジュン「……綾乃さん……お願い……」

綾乃「（注射器を構え微笑み）大丈夫、ニンニク注射みたくないもんだから」

ジュン「……僕……変わるから……頑張るから……」

綾乃「（呆れ）変わる？　頑張る？　今更遅いよ。私はあの夜変わってほしかった。それに変わるとか頑張るとかもう関係ないの。どうでもいいの。私はあなたが必要じゃない、それだけ」

ジュン「……そんな……（涙が溢れる）」

ジュンの腕を消毒する綾乃、暴れ出すジュン、ジュンを押さえ注射器を近づける綾乃、注射針を刺す。

ジュン「（恐怖に包まれ）……やだ……」

淡々と薬を注入していく綾乃、涙を流しながら激しく暴れるジュン。

ジュン「……やだ……やだ……やだ……」

淡々と薬を注入していく綾乃。

パトカーのサイレンが近づいてくる。  
ジュン「……やめて……お願い……」

薬の注入が終る、そっと引き抜き空の注射器をじっと見つめる綾乃。

綾乃「（満足そうに微笑み）投与完了。じゃあね、ジュン、バイバイ」

ジュン「……やだ……（体がビクつとし）……ごめん、なさい……綾乃さん……（更に体がビクつとし意識が薄れ）……ごめんなさい……（意識を失いそうになり）……ごめ……ん……な……さ……さ……（意識を失う）……カッタアウト。」

### ○暗闇

不安と恐れが渦巻く真っ暗な暗闇。

### ○大学病院・病室（深夜）

壁一面のガラス窓に打ち付ける雨、雨音は聞こえない、病室内は薄暗く静寂、近未来的なベッドで寝ていた老人がゆっくりと目を開ける、それに反応して自動的に穏やかな明かりが点灯。

自分の置かれている状況が理解できない様子の老人、上半身を起こそうとすると自動的にベッドが起き上がる、ベッドから降り病室内を見る老人、サイドテーブルに何度も修理した感じの古いスマホが置いてある事に気づく、それを皺だらけの手で取る老人、慣れた手つきで起動させ動画を再生する。

動画の男・純也（52）「……今朝、姉さんが死んだ……自殺したよ」

老人「（動揺）……」

純也「あの後警察に捕まったけど責任能力がなく罪には問われなかった。そして……ずっと入院してた……35年も……」

老人「……」

純也「姉さんは……あの頃から……すでに病んでたんだ。それに気づかなかった……いや……気づいてたよね……俺も……君も……」

老人「……」

苦悶の表情の純也、少し間。

純也「……君が知らないであろうことを伝えておくよ、今さら意味がないけど……。俺の自殺計画を知った姉さんは俺が実行する前に不倫をネタに篠田先生を脅し医療ミスを装い過剰投与で君を殺すよう命じていたんだ……それを盗聴していた俺はなんとしたん止めようと薬を奪った……姉さんと取引するために」

老人「……」

純也「姉さんは俺が自殺したらジュンと遥香を殺して自分も死ぬと言った……俺はジュンを殺したら俺も死ぬと姉さんに伝えた……そして姉さん納得してくれたよ。今まで通り人格融合を進めていこう、それでいいよ、それでみんな幸せだねって」

老人「……」

純也「ところが……次の日……松村に呼び出された姉さんは……衝動的に松村を殺してしまつた……いや……計画的だったのかな……自分の異常性を俺に見せつけるために殺したのかも……知らない……姉さんの病の深刻さを思い知らされた……」

老人「……」

純也「やっぱり融合なんかいや……絶対いや……純也は純也のままでもいい……あの汚らわしい男と混ざらないで……お願い……助けて……って……姉さんは泣きじゃくつた……」

老人「……」

純也「……苦しみから逃れるために自分を殺して君を生かすべきか……君を殺して苦しみと共に生きていくべきか……人格崩壊の可能性が高くこのまま共存という選択肢はなかった……俺はどうすればいいかわからなかった……」

老人「……」

純也「……俺はあの写真のあの場所に行った……あの写真が大好きなんだ……君と姉さん……最高に素晴らしい写真だよ……」

× 浜辺でスマホのジュンと綾乃の写真を  
 × 目に涙を浮かべ微笑みながら見ている  
 純也。

純也「（俯き）：そしてあの浜辺で：俺は：  
 君を殺す事にした：」

老人「：：：：：」

純也「：姉さんを守るのは俺しかいないか  
 らとか：融合の結果君の弱気な部分が混ざ  
 ってしまったからとか：色々理由付けを  
 考えたけどそうじゃない：きつと俺は：た  
 だ生きたかっただけなんだ：」

老人「：：：：」

純也「：そうだ、遥香は無事だよ：あの日以  
 来会ってないけど。この先も会うことはな  
 いだろう。それでいいよ：それでいい。ど  
 こかで普通に暮らしてるのかな：」

老人「：：：：」

純也「：何独り言を言ってるんだろね：でも  
 君しか話す相手がいないんだ：いつか君が  
 この動画を見る日が来るのかな：」

老人「：：：：」

別の動画を再生させる老人。  
 動画の男・純也（87）「：最近：発作に似  
 た症状が出るようになった：あの薬の効果  
 が薄れてきたのかな：いつ君と交代しても  
 おかしくはない：無様にこの年まで生きて  
 しまったよ：：ジュン：：ごめん：：疲れ  
 た：：（動画が終わる）」

老人「：：：：（スマホが手から落ちる）」  
 ふうらふらと窓に近づく老人、呆然と窓  
 の外を見る、遥か眼下にライトアップ  
 された東京タワーがある。  
 目から涙が溢れ出す老人、絶望に満ち  
 た顔で思い切り窓ガラスを叩く。

老人「（嗚咽）：：あああああああ！」

おわり